

# 多言語共生を目指す日本語教育実習における 教師の成長と役割

池田広子・金井淑子・田淵七海子・テンチャローン モンルタイ・半原芳子・松本なつみ

本研究は多言語共生を目指した大学院教育実習を対象とし、①ティーム・ティーチングを導入した教師の役割②多言語共生を目指した実習における教師の意識変容③非母語話者教師の意識変容④内省モデルの観点から見た教師の成長という4つの観点から研究を行なった。以下に4つの研究を紹介する。

【研究1】ティーム・ティーチングにおける教師の役割の一考察—インターアクションに注目して—

半原芳子、松本なつみ、テンチャローン モンルタイ

## 1. はじめに

近年国内外における日本語教育の需要は多様化し、各学習者に適した学びの場を提供することが求められている。その実践の一つとして、ティーム・ティーチング（以下 T.T.）を導入している教室もあるが、日本語教育における T.T.の研究は数が少なく、多くの実践例の報告・研究が急務と言えよう。

本研究では、T.T.を採用しているお茶の水女子大学大学院の実習授業を取り上げ、そこで行われている実習生と参加者間のインターアクションに注目し、T.T.における教師の役割について考察する。そのため、以下の2点を研究課題(RQ)とした。

RQ1: 実習生と参加者間でどのようなインターアクションのパターンが見られるのか。

RQ2: T.T.において、実習生はどのような役割を担っているのか。

## 2. 研究方法

### 2.1 調査対象

当該実習の子どもクラス3日目を対象とする。実習では子どもクラスと大人クラスが開講され、子どもクラスを担当した院生は6名であった。各回の授業は、活動全体をコーディネートするメイン・ティーチャー（以下 MT）と、MTをサポートするアシスタント・ティーチャー（以下 AT）で構成された。

分析の資料には教室活動のビデオと MT2 名の発話資料、実習生によるフィールド・ノートを使用した。

### 2.2 分析枠組み

村岡(1999)によると、教室内で行われる1対1あるいは1対複数の話し手のやりとりは教授エクスチェンジと呼ばれ、先制(Initiation)、応答(Response)、フィードバック(Feedback)のIRF構造をもつ。本研究では、このIRFの枠組みを援用し、インターアクションのパターンを明らかにする。

## 3. 結果

### 3.1 インターアクションのパターン

実習生と参加者の間で様々なインターアクションのパターンが見られ、MTとATそれぞれにおいて特異なパターンが見られた。以下でその特異性について具体例を挙げながら、T.T.における実習生の役割をMT・ATそれぞれの観点から述べる。

#### 3.2.1 実習生の役割(MT)

MT2名は、1名が教室全体に指示を出したり、活動の流れをコントロールしているときに、もう1名は補佐役にまわり、指示の補足や活動の流れに影響しかねないハプニングをフォローしていた。両者の役割の相違から、前者をMMT(Main Main Teacher)、後者をMAT(Main Assistant Teacher)と呼び、以下区別して記述する。MATはMMTとATの仲介役の役割も果たしていた。それは、ある参加者がATに投げかけた教室活動についての質問が、MATを通じてMMTに伝えられ、最終的にMMTが参加者に活動の指示をするというインターアクションのパターンから示唆されよう。MT2名はそれぞれ、活動内容や子どもの反応に応じて可変的に両役割を担っていた。これはT.T.だからこそ可能なことであり、またこの連携スタイルは、状況に応じた活動展開を実現していく可能性を持つものであると言える。

### 3.2.2 実習生の役割 (AT)

AT は参加者の声を拾ったり、活動中に生じた参加者個々の疑問に対応したりと、様々な役割を担っていた。それは MT に届かなかった参加者の小さな声を近くにいた AT が拾って MT や教室全体に投げかけているパターンや、参加者が MT ではなく AT に質問をしているパターンから伺える。このような参加者側の視点に立った AT の存在は親しみやすい教室作りに影響していると思われ、また AT が主体的に教室活動に参加することで、教室内のインターアクションが促進される可能性を持つと言える。今後、T.T.の持つ可能性を追求していきたい。

#### 参考文献

村岡英裕(1999)『日本語教師の方法論 教室談話分析と教授ストラテジー』 凡人社

### 【研究 2】多言語多文化共生を目指す日本語教育実習における教師の意識変容

田淵七海子

#### 1. はじめに

近年定住外国人の増加に伴い多様な言語文化背景を持つ人々を迎え、日本語教育の現場も多言語多文化共生を視野に入れることが必要となってきた。当然のことながら、日本語教師の養成においてもその視点を取り入れることが求められる。多言語多文化共生を目指す日本語教育実習での経験や学びを追求していくことは、そこで求められる教師の役割や必要とされる教授技術を位置づけていく上で重要である(池田 2004)。

小熊・ニャンジャロンスック(2001)は、日本語教育を専門とする大学院で行われる教育実習が、実習生の日本語教師観・日本語教育観にもたらす認識の変容を明かにするために、質問紙とインタビュー調査を行った。しかし、この実習は、多言語多文化共生を目指した実習を分析したものではない。そこで、本研究では小熊・ニャンジャロンスック(2001)と同一大学院での実習プログラムでありながら、多言語多文化共生を目指す教壇実習において実習生の日本語教師観や意識の変容を明らかにすることを目的とする。そのため以下 2 点を研究課題(RQ)とした。

RQ1 教師の意識はどの側面において変容したか

RQ2 意識の変容はどのような気づきによってもたらされたのか

## 2. 研究方法

### 2.1 調査対象とデータ収集方法

2004 年度お茶の水女子大学大学院の教壇実習 8 日間の実習前後に実習生 14 名全員を対象に、小熊・ニャンジャロンスック(2001)で使用された 6 段階 29 項目の質問紙と自由記述、実習後に大きな変容の見られた 2 名に対して半構造化インタビューを行った。

### 2.2 分析方法

RQ1 は本実習の特色を示すために 29 項目について得点を平均化し実習前後での数値の増減を見た。特に小熊・ニャンジャロンスック(2001)で実習前後での変化が全く見られなかった項目にのみ注目した。RQ2 については、自由記述とインタビューから明らかになったことを RQ1 で得られた項目別に分類した。

## 3. 結果

### 3.1 どの側面において変容したか

①参加者への接し方②参加者ニーズ③教師観の変化に関する項目に変容が見られた。特に、「日本語の知識を伝えることよりも参加者への接し方に重点を置く」は、小熊・ニャンジャロンスック(2001)では変化が全くなかったにもかかわらず、本調査では 29 項目の中で最も変化の大きな項目だった。

### 3.2 どのような気づきによって変容したか

①参加者への接し方については教師も参加者の一員となった対等な関係、参加者への興味の増幅などの気づきが挙げられた。②参加者ニーズは、個人に対応した活動、吸収できるかどうかまで考えること③教師観では教師としての自分との対峙がネガティブに捉えていた経験を捉え直したり、教師主導の視点を省みたりしていた。非母語話者実習生にとっては母語話者に劣らないという自信を得ていた。④ティームティーチング(TT)における教師の役割については、メインティーチャー(MT)とアシスタントティーチャー(AT)の役割を明確なものにし、AT は MT の指示を待つのではなく自ら決断して動く主体的な存在であると認知した気づきが見られた。

これらのことは、実習生が参加者個々の学びを実現するために今何が必要か、今何ができるかを常に考えていたことを意味しているだろう。そして、それは多言語多文化を志向し、一人一人が主体的に関わり協働でクラスを作っていくという本実習プログラムのあり方に起因していると考えられる。今後は

縦断的調査を試みたい。

### 参考文献

- 池田広子(2004)「多言語多文化共生を目指す教育実習における教師の意思決定—成人学習者を対象とした場合—」『言語文化と日本語教育』27号 182-197
- 小熊利江・スニーラット ニンジャローンソック(2001)「教育実習を通して起こる認識の変化—日本語教育を専門とする大学院生の場合—」『言語文化と日本語教育』21 71-82

### 【研究3】非母語話者教師の役割に対する意識の変容—多言語多文化共生を目指す教育実習—

金井 淑子

#### 1. はじめに

日本語教員養成についての調査(文化庁)は、教員の内訳に母語話者(以下 NS)教師か非母語話者(以下 NNS)教師かはない。これから日本国内においても NNS 教師が増えていくと考えられるが、NNS 教師についての研究は少ない。教育実習を通して、NNS 教師の意識変容を明らかにした上で NNS 教師の役割について検討する。

RQ1: NNS 教師の意識はどのように変化したか。

RQ2: NNS 教師は自分の役割をどのようにとらえているか。

#### 2. 研究方法

##### 2.1 調査対象

対象者はお茶の水女子大学大学院の教壇実習(8日間)に参加した NNS 実習生 2 名(韓国・中国)。参加者の国籍は日本、中国、フィリピン、ベトナム。

##### 2.2 分析方法

実習直前、実習 2 ヶ月後(10月)の 2 度、1 対 1 の対面でインタビューをおこない、音声テープを文字化し、KJ 法を用い、6 カテゴリーに分類し、実習前と実習後の差異をみる(表 1)。

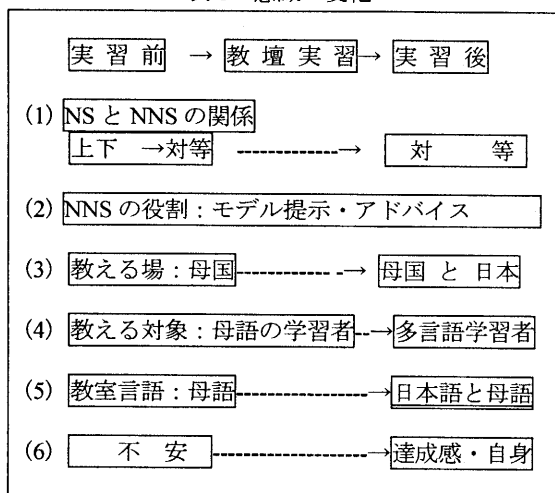
#### 3. 結果と考察

NNS 実習生の意識が 6 つの項目に分けられた。

- (1) NS と NNS の関係: 実習前と教壇実習を通して意識には変化がみられない。実習前の参加者募集、テーマや授業の進め方など準備段階からいろいろな場面で NS 実習生と NNS 実習生が協働で対等であった。実習は NS 実習生と NNS 実習生のチームティーチングであり、問題解決型の授業であった。

- (2) NNS の役割: 実習前と教壇実習を通して、意識が変わらなかった。NNS 実習生は、日本語の

表 1 意識の変化



- モデルを提示し、アドバイスすることができた。
- (3) 教える場: 当初「母国で日本語を教える」と考えていたが、実習の経験により、「日本でも日本語を教えることができる」という教える場に対する広がりが見られた。
- (4) 教える対象: 実習前、教える対象について、母国人以外に教えることは考えなかったが、実習後は、母国人と外国人に教える対象が広がっている。日本人やいろんな国の人が参加した多言語の実習を経験したからだと考えられる。
- (5) 教室言語: 母語で教えていたのが、他の外国人や日本人にも教えたので教室で使われる言語が母語と日本語と多言語に変わってきている。
- (6) 不安: 実習前にあった不安が、教壇実習を通して、日本人や多言語の参加者に教えることで自信を持ち達成感を得るというように肯定的に変化している。多言語の参加者に日本語を教えることは多言語多文化共生を目指している教育実習だからできたものだと思う。今後は NNS 実習生数を多く調査していきたい。

### 参考文献

- 石井恵理子(1996)「非母語話者教師の役割」『日本語学』vol.15 87-94
- 文化庁(2004)「国内の日本語教育の概要」

### 【研究4】実習プログラムのあり方は教師の成長にどう影響するのか

## —内省モデルに基づく実習を対象として—

池田 広子

### 1. はじめに

日本語教員養成における教壇実習は、従来、一定の教授技術の型や知識を目指し、マスターしていくという「教師トレーニング型」に基づくプログラムが行なわれていたのが一般的だった。それは、一定の型を習得すれば、どの授業にも通用するという前提に基づいていたに他ならない。しかし、岡崎・岡崎（1997）は「近年、教育現場の複雑さや多様な学習者に応じ、画一的な教師像や実習は限界があり、指導者がすべてを決定し、全体を一律に進めていく形式の実習は多様な学習者の多様な問題、複雑な教室場面の側面に対し、その中で内省という視点を形成していくという点から十分とはいえない。」と指摘している。このような現状を打破する解決策として「教師の成長」を中核に置く実習が追究され、これを可能にする1つの形として「内省モデルに基づく実習」が提唱されている。しかし、「内省モデルに基づく実習プログラム」において教師がどう成長していくのか、その詳細なプロセスについては殆ど明らかにされていない。本研究では、内省モデルに基づく実習を取り上げ、どのような教師の意識変容が見られるのかを明らかにした上で、プログラムのあり方と教師の成長の関係を検討する。そのために、次の2点を研究課題として設定した。

課題1 実践—観察—内省のサイクルの中でどのような意識変容が見られるか。

課題2 気づきにおいて、教師はこれまでの「前提」をどう捉え直しているのか。

### 2. 研究方法

#### 2.1. 調査対象

①2004年度お茶の水女子大学大学院の教壇実習（8日間）に参加した実習生3名。実習生3名は実習の4日目～6日目の授業を担当した。

#### 2.2. データの収集方法

①授業前インタビュー②授業中のプロトコルデータ：吉崎（1991）を参考に再生刺激法により、授業中の教師の内省を語ったものを録音した。これを基に

「意思決定場面分析表」を作成③授業実施後のインタビュー④アドバイスセッションの話し合いデータ

### 3. 結果と考察

#### 3.1. 実践—観察—内省サイクルにおける意識変容

3日目までの授業観察を基に、どう授業を見直し、実践、改善を行なっていくのかについて実習生の意識変容を丹念に追跡し、質的分析した。分析の結果、当初計画していた授業案では、授業目標に達成できないことに気づき、これまで前提としてた考え方を批判的に捉え直し、教授観、教師観を拡大していくという変容が見られた。そして、予定していた授業計画を大幅に変更し、授業を実施・評価し、教授観、教師観の見直しと再検討を行うサイクルが見られた。

#### 3.2. 気づきにおける「前提の捉え直し」

教師の役割は、「学習を管理し、筋道を付ける」という前提に対し、「教師は邪魔をしているのではないか。取って代わり、管理しすぎないことも大切である」という気づきが見られた。そして、「なぜこれまでそう考えていたのか、本実習ではなぜそうする必要があるのでか」という点まで下りて、熟慮的に考え、「前提の捉え直し」を行うものが観察された。このような結果は、①アドバイスセッションで実習生が主体となり、問題点を把握する②目標に照らし合わせた改善案を見出す③改善案を即実践し、評価するという「自己決定能力」を支えるプログラムに加え、内省サイクルが有機的に機能していたことに起因すると示唆される。また、表面的な教授技術ではなく、授業の内容面を重視した教師の力量を支えるものであると考えられる。今後は「教師トレーニング型」における教師の意識変容を取り上げ、比較していきたい。

#### 参考文献

岡崎敏雄・岡崎眸（1997）『日本語教育の実習 理論と実践』アルク。

これらの研究は科学研究費補助金研究基盤（B）課題番号14380117代表：岡崎眸「多言語多文化を切り開く日本語教育と教員養成に関する研究」の一部である。

いけだひろこ・かないとしこ・たぶちなみこ・てんぢゃろーん もんるたい・  
はんばらよしこ・まつもとなつみ／お茶の水女子大学大学院